

前田本『色葉字類抄』と黒川本『色葉字類抄』の
漢字字体の差異について——伊部の漢字——

藤 田 夏 紀

目 次

- 一、はじめに
- 二、方法
- 三、資料
- 四、漢字字体の差異の特徴
- 五、『蒙求』の漢字字体との比較
- 六、まとめ

一、はじめに

片仮名の字体には歴史的変遷が見られ、書写された時代を特定するための指標となる特徴が明らかとなつて⁽¹⁾いる。これと同じように漢字の字体にも書写された時代により一定の特徴が見られるのではないかと考えられているが、いまだ⁽²⁾全容は明らかになつていない。これは、仮名に比べて漢字は字の種類が多いため、全体像をとらえるのが困難である⁽³⁾ためと思われる。

従来の漢字⁽³⁾字体の変遷に関する研究は、

1、一資料内の全ての漢字を対象として、漢字字体の実態と特徴を記述する。

2、複数の資料において、対象とする漢字をしほり、書写年次や資料の性格の違いによる漢字字体の特徴を記述する。という二方向を軸に進められてきた。さらになぜ漢字字体に変化が起こったのか、中国の漢字と日本の漢字との関係はどうか、明らかにしていくことが必要であろう。

本稿では、鎌倉初期書写の前田本『色葉字類抄』と江戸中期書写の黒川本『色葉字類抄』との見出し漢字の字体にどのような差異が見られるか、その様相を調べ、書写年次の違いによる漢字字体の差異の特徴を明らかにすることを目的とする。

二、方 法

次の方法に従って、漢字字体の差異の特徴を明らかにしていくこととする。

1、鎌倉初期書写の前田本『色葉字類抄』と江戸中期書写の黒川本『色葉字類抄』との対応する箇所に見出し漢字として記載された漢字を用例として取り上げる（ただし、一方の資料の対応箇所に漢字が存在しない場合、汚れなどにより字体を判別しがたい場合は除く。また、二本の字体に差異が認められないと判断した場合についても除く。尚、今回は「伊部」に属する漢字のみを対象とした）。

『色葉字類抄』を対象として選んだ理由は、国語辞書であるという性格上、比較的丁寧に書かれているためであり、また、あらゆる漢字の種類を網羅しているためでもある。さらに、書写年次の異なる二本が存在することにより、書写年次の違いによる漢字字体の差異について考察していく上で資料価値があると考えたからである。

2、二本の対応箇所の漢字字体を比較し、字体が一致していないと判断できるものを選び出し、字体の差異の特徴を記述する。このとき、以下の分類項目を設定した。

前田本『色葉字類抄』と黒川本『色葉字類抄』の漢字字体の差異について

(1) 画数が変わるもの

A 画数が増えるもの

B 画数が減るもの

(2) 画数が変わらないもの

C 点画の向き・角度・位置だけ変わるもの

D 画の長さだけ変わるもの

E その他

3、『色葉字類抄』において認められた漢字字体の差異の特徴を、院政期書写の国立故宮博物院蔵本『蒙求』と江戸後期書写の宮内庁書陵部蔵本『蒙求』とを比較した際に認められた漢字字体の差異の特徴と比較して、『色葉字類抄』と『蒙求』とに共通する漢字字体の特徴があるかどうか調べる。

三、資料

ここでは、本稿で対象とした文献資料の書誌的事項について述べる。

1、『色葉字類抄』について⁽⁴⁾

①前田本『色葉字類抄』

『色葉字類抄』は橘忠兼編のイロハ引きの国語辞書である。末尾の跋文に「内膳典膳橘忠兼」とあり、編者は宮内庁の主上の食事のことを掌る従七位下に位置する役人であったことが分かる。前田本は中巻および下巻の一部が欠けている。下巻巻末の跋文の上欄に本文と同筆で、天養から養和まで(一一四四～一一八二)の年号とその年数を記している。一一八二年以降に書写したものと認められる。見出し漢字には朱筆で、声点、鈎点を丁寧

に付している。見出し漢字に付された注記の中には漢字字体に関するものもあり、正字・俗字に関するもの、異同に関するもの、典拠に関するものなどが存する。書体は楷書中心で書かれているが行書も交じる。

②黒川本『色葉字類抄』

江戸時代中期の書写である。上巻巻頭に弘化三年（一八四六）に黒川春村の書写した文章が付してある。また、表紙裏の付箋には永禄八年（一五六五）書写の尊経閣文庫蔵二巻本の奥書が記されている。さらに、下巻巻末には天文元年（一五三二）書写の花山院本の奥書が記されている。黒川本は、前田本の摩滅した箇所をそのまま写していること、下巻の跋文の中に前田本の誤写のまま辞書の本文中にあるべき字が書き写されていることから、前田本を親本として書写された本であると言われるが、片仮名の誤写の状況などから、黒川本の直接の親本は前田本ではなく、間に別の写本を経ていると考えられている。前田本にある声点や鈎点は書き写していない箇所もある。片仮名の注記に関しても、漢字に関しても多数の誤写が認められる。ただし、細字によって校異が記されているものがある。前田本とは行数や一行の字数は異なる。漢字に字の大きさや書き癖の違いがあることから複数の書写者が存在したと考えられる。書体は楷書で書かれている。

2、【蒙求】⁽⁵⁾について

①国立故宮博物院蔵本『蒙求』

『蒙求』は唐代の李瀚が八世紀半ば頃までに著したものである。内容は中国の有名な人物の逸話を四字一句の韻文にまとめたもので五九六句から成る。日本には九世紀後半には伝来し、幼学書として流布した。国立故宮博物院蔵本は書写年次、書写者は不明だが、ヲコト点や字音を記した片仮名字体により、院政期の書写と言われる。冒頭部に「福家／蔵書」の朱印があり、宮内庁書陵部蔵本の奥書に記されている、宿禰である小槻家に伝来した

前田本『色葉字類抄』と黒川本『色葉字類抄』の漢字字体の差異について

ことが分かる。一句から三〇二句までの零本である。書体は楷書で書かれている。

②宮内庁書陵部蔵本『蒙求』

寛政六年（一七九四）に法眼謙宜が書写したものである。謙宜は伊達家に仕えた連歌師、猪苗代謙宜である。奥書に「左大史小槻敬義朝臣家本所書写也」とあることから、国立故宮博物院蔵本の転写本であることは明らかである。行数、字配りは一致し、虫損箇所も丁寧に写し取っている。声点は写していない箇所もあり、人名に引かれる朱書きの線も書き写されていない。書体は楷書で書かれている。

四、漢字字体の差異の特徴

『色葉字類抄』伊部の見出し語の漢字字体を調査した結果、全用例字数一六九六字のうち、七八六字（46・3%）について前田本と黒川本の漢字字体に差異が認められた。これらの用例について差異の特徴を五項目に分類した。各々の分類項目に属する用例字数は以下の通りである。

- (1) 画数が変わるもの
 - A 画数が増えるもの …………… 三三六組 (35・2%) [例 恵・惠]
 - B 画数が減るもの …………… 一四一組 (14・8%) [例 來・来]
- (2) 画数が変わらないもの
 - C 点画の向き・角度・位置が変わるもの …………… 二七〇組 (28・2%) [例 羽・羽]
 - D 画の長さが変わるもの …………… 一八一組 (18・9%) [例 劣・劣]
 - E その他 …………… 二八組 (2・9%) [例 能・能]

合計 九五六組

※例に挙げた漢字は上が前田本・下が黒川本の字体を示す。以下これに従う。用例字数よりも差異の特徴の組数の方が多いのは、一字について、二つ以上の差異の特徴が認められる場合があるからである。例えば、「定・定」字には(え↓疋)(へ↓宀)という二つの特徴が見られる。

以下に分類項目ごとの具体例の一部を示す。

〔表1〕 A 画数が増えるもの

澄澄 15オ3 12オ4	母母 5ウ2 4ウ2	惠惠 11オ6 9オ7	定定 13オ7 10ウ8	朶朶 10ウ1 8ウ4	蛤蛤 5オ4 4オ5	閑閑 13ウ6 11オ5	怡怡 6オ7 5ウ5	苙苙 3ウ7 3オ7	奇奇 7オ5 6オ1
引引 13ウ5 11オ4	苒苒 3ウ5 3オ5	傳傳 10ウ3 8ウ6	碇碇 8ウ6 7ウ5	棉棉 10ウ2 8ウ4	蛸蛸 5オ5 4オ7	閑閑 9ウ5 8オ3	慢慢 6ウ7 5ウ4	苒苒 4オ3 3ウ2	弟弟 3オ1 2ウ4
彈彈 7ウ7 6ウ1	証証 7オ6 6オ2	簿簿 10ウ1 8ウ4	從從 5ウ3 4ウ3	換換 9オ1 7オ8	雷雷 2オ3 2オ1	鬧鬧 9ウ5 8オ3	恫恫 7オ1 5ウ5	蕪蕪 3ウ6 3オ6	荷荷 15オ5 12オ6
卷卷 4オ2 3ウ1	綻綻 8ウ3 7オ2	坦坦 6ウ7 5ウ4	義義 3オ6 2ウ7	標標 14オ5 11ウ2	露露 14オ3 11オ8	蘭蘭 13ウ5 11オ4	惜惜 7オ1 5ウ6	恻恻 7オ2 5ウ7	菓菓 6ウ3 5ウ1
捲捲 11オ2 9ウ3	磴磴 2ウ5 2ウ1	椽椽 10オ7 8ウ3	檄檄 10ウ2 8ウ5	寔寔 4オ5 3ウ3	懣懣 7オ3 5ウ8	虻虻 5オ5 4オ7	悔悔 7オ4 5ウ8	忡忡 7オ4 5ウ8	菜菜 4オ5 3ウ3

(注)用例は、各々上字が前田本、下字が黒川本であり、上が前田本の所在、下が黒川本の所在を示す。以下これに従う。なお、用例字は、具体的な字の形を客観的に示すため、影印本の写しを使用している。

出 9ウ4 8オ2	勤 7ウ2 6オ4	械 2ウ6 2ウ3	暗 6ウ7 5オ7	出 9ウ4 8オ2
咄 7オ6 6オ2	勸 13ウ5 10ウ6	驚 4ウ5 4オ7	肅 11オ5 9オ6	浄 11ウ7 9ウ6
窟 3オ1 2ウ4	以 12ウ6 10ウ1	鵠 4ウ7 4オ5	師 2オ3 2オ1	得 6ウ3 6オ1
恣 10ウ7 9オ1	陸 4オ1 3オ8	祐 2ウ6 2ウ3	龜 5オ3 4オ5	穉 3ウ1 3オ2
説 14ウ3 11ウ6	寔 6ウ4 5ウ2	穩 7オ2 5ウ6	冠 11オ4 9オ5	判 4オ3 3ウ2

分類項目のうち最も用例字数が多いのが「A 画数が増えるもの」であり、三三六組の用例が存し、全体の35・2%を占める。特徴としては、草冠の形が三画から四画に変わるもの(ナ↓サ)、立心偏の形が二画から三画に変わるもの(ナ↓ナ)、門構の形が二画から八画に変わるもの(門↓門)、虫偏の形が五画から六画に変わるもの(虫↓虫)、雨冠の形が六画から八画に変わるもの(雨↓雨)、金偏の形が七画から八画に変わるもの(金↓金)、弓偏の形が二画から三画に変わるもの(弓↓弓)、糸偏の形が三画から六画に変わるもの(糸↓糸)、足偏の形が五画から七画に変わるもの(足↓足)、方偏の形が三画から四画に変わるもの(方↓方)のように、部首と成り得る形に同じ種類の部首だと分かる範囲内で黒川本の方がより丁寧な点画を省略する事なく書き写していることが分かる。前田本が行書で書かれ、黒川本が楷書で書かれていると言える用例が多くみられる。また草冠、立心偏、門構、虫偏、雨冠については、その部首に属するほぼすべての漢字が書き改められている。

また、手編が木偏に変わるもの(木↓木)、立心偏が土偏に変わるもの(土↓土)、示偏が衣偏に変わるもの(衣↓衣)のように部首が別の部首に変えて書かれている例もあった。常用漢字(新字体)と旧字体の関係にあり、(恵↓恵)のように黒川本の方が旧字体を使っている例も見られた。中には明らかに意味の異なる別字に誤写している例もあり、細字で

傍らに小さく校異が記されているものも存する。(遊↓遊(遊歇))このように校異が記されている例は伊部において全部で17例認められた。

〔表2〕 B 画数が減るもの

没 没 9ウ5 8オ3	馬 馬 14オ1 11ウ6	稻 稻 4オ7 3ウ5	來 來 14ウ5 11ウ8	霹 霹 2オ4 2オ2	毒 毒 6ウ6 5ウ3	磯 磯 2ウ4 2ウ2
穀 穀 6オ7 5オ6	烏 烏 5オ4 4オ6	色 色 12オ5 10オ3	練 練 9オ3 7ウ2	挑 挑 6ウ4 5ウ2	祝 祝 10オ2 8オ7	巡 巡 10オ7 8ウ3
殿 殿 12オ5 10オ3	鼠 鼠 4ウ4 3ウ8	艶 艶 13オ3 10ウ4	勞 勞 7オ2 5ウ6	飛 飛 13オ5 10ウ6	謚 謚 7オ7 6オ2	寢 寢 10オ6 8ウ2
監 監 10オ7 8ウ3	鼯 鼯 4ウ4 3ウ8	弟 弟 5ウ4 4ウ4	榮 榮 10オ3 8オ7	猛 猛 14ウ5 11ウ8	角 角 10オ4 8ウ1	致 致 10オ5 8ウ2
藍 藍 8ウ5 7オ5	鼯 鼯 4ウ3 3ウ8	惹 惹 11ウ7 9ウ6	辞 辞 15オ1 12ウ2	栢 栢 4オ2 3ウ1	偷 偷 6ウ5 5ウ2	緻 緻 15オ2 12オ4

用例数は一四一組で全体の14・8%を占める。特徴としては、爻旁の形が七画から四画に変わるもの(豆↓豆、鼠部)の形が十六画から十一画に変わるもの(鼠↓鼠、白部の形が六画から五画に変わるもの(臼↓旧)、辛部の形が八画から七画に変わるもの(辛↓辛)のように部首と成り得る形に関して、同じ種類の部首だと分かる範囲内で黒川本の方が画数の少ない形で書かれているものがある。旧字体と常用漢字(新字体)の関係にあり、(來↓來)のように前田本の方が旧字体を使っている例も見られた。

〔表3〕 C 点画の向き・角度・位置が変わるもの

齋齋 7ウ5 6オ7	切切 14オ1 11オ7	納納 9ウ4 8オ2	羽羽 14オ3 11オ8	脊脊 3オ3 2ウ5	懋懋 11オ5 9オ6	物物 13オ2 10ウ3	桓桓 10ウ3 8ウ5	免免 13オ7 10ウ8	駒駒 5オ1 4オ4	宅宅 3オ2 2ウ4	玄玄 12ウ1 10オ6
島島 11オ2 9オ5	切切 6ウ7 5ウ4	幾幾 14ウ1 11ウ5	疵疵 10ウ2 8ウ5	研研 2ウ4 2ウ1	肩肩 14ウ2 11ウ6	文文 5オ4 4オ5	桓桓 10ウ4 8ウ6	晚晚 14オ6 11ウ3	鋪鋪 4ウ7 4オ2	奇奇 12ウ2 10ウ6	言言 10ウ4 8ウ6
魁魁 5ウ6 4ウ6	疾疾 6ウ7 5ウ5	譏譏 14ウ5 11ウ5	翹翹 4オ2 3ウ1	舩舩 10ウ2 8ウ5	誚誚 11ウ4 9ウ3	故故 2オ7 2オ6	掲掲 12オ1 9ウ7	指指 11オ3 9オ4	渙渙 5ウ5 4ウ5	奠奠 5オ1 4オ3	計計 13ウ2 11オ2
福福 16ウ1 13オ5	脩脩 7ウ2 6オ4	忙忙 11ウ6 9ウ5	内内 9ウ4 8オ2	艘艘 8ウ6 7オ6	經經 11オ2 9オ3	放放 10オ7 8ウ3	摧推 10オ7 8ウ3	指指 12ウ6 10ウ1	衡衡 6ウ4 5ウ1	鋪鋪 4ウ6 4オ2	意意 13オ6 10ウ7
稂稂 3ウ2 3オ2	叱叱 7オ6 6オ2	忘忘 12オ3 10ウ1	汕汕 6ウ4 5ウ1	舩舩 14オ1 11ウ6	媯媯 6オ1 5オ7	傲傲 11オ4 9ウ5	遊遊 13オ3 10ウ4	格格 10オ7 8ウ3	鱗鱗 4ウ6 4オ2	蛛蛛 5オ1 4オ4	家家 12オ3 10オ3

用例数は二七〇組で全体の28・2%を占める。特徴としては、言偏やウ冠の上の点が離れているもの(上↓二)、魚偏の上の部分の形が変わるもの(一↓二)、手偏の三画目の書かれる向きが変わるもの(オ↓オ)、支繞の一画目の向きが変

わるもの(女↓文、列火の一画目の点の向きが変わるもの(…↓…)などのように細かい点画の位置や向きに関するもの)ではあるが、同じ特徴をもつ漢字が多数存在することは注目に値すると考えられる。

「表4」 D 画の長さだけ変わるもの

① 画が長くなるもの

巖 巖 9オ4 9オ4	最 最 10オ1 8オ5	死 死 10オ3 8オ5
劣 劣 6オ5 5オ3	職 職 13オ4 10オ5	多 多 14オ2 11オ3
念 念 7オ3 5オ8	體 體 13オ6 10オ7	聊 聊 11オ3 9オ3
喃 喃 4オ5 4オ1	嶺 嶺 4オ1 3オ8	嶽 嶽 6オ5 5オ3
達 達 10オ2 8オ5	瞋 瞋 7オ3 5オ7	耿 耿 7オ1 5オ5

② 画が短くなるもの

湯 湯 2オ3 2オ8	鴝 鴝 4オ1 3オ5	壹 壹 8オ1 6オ2
鴝 鴝 4オ3 3オ7	餉 餉 10オ4 8オ1	瞠 瞠 6オ4 5オ3
奄 奄 10オ1 8オ4	愈 愈 9オ7 8オ5	禱 禱 10オ2 8オ7
遠 遠 11オ2 9オ3	儻 儻 7オ2 6オ4	鳥 鳥 4オ7 3オ5
海 海 4オ5 3オ3	宿 宿 6オ1 5オ7	鳩 鳩 4オ7 3オ5

③ 画が長くなる部分と短くなる部分と両方あるもの

未 未 10オ6 8オ8	遙 遙 10オ1 8オ4	志 志 16オ6 13オ1	伊 伊 16オ3 13オ7	市 市 5オ5 4オ5
-----------------------	-----------------------	------------------------	------------------------	----------------------

用例数は一八一組で全体の18・9%を占める。このうち、画の長さが長くなるものか86組であり、画の長さが短くなるものか86組である。

前田本『色葉字類抄』と黒川本『色葉字類抄』の漢字字体の差異について

るものが82組であり、長くなる部分と短くなる部分とが両方あるものが13組である。画の長さが長くなるものの中では、(タ↓夕)、(耳↓耳)、(刀↓力)(幸↓幸)のような例が見られる。画の長さが短くなるものの中では、(壹↓壹)、(銷↓銷)、(母↓母)(鳥↓鳥)のような例が見られる。長くなる部分と短くなる部分とが両方あるものの中では、(未↓未)、(志↓志)のような例が見られる。

〔表5〕 E その他

數	數	鷓	論	導	吃
3オ36	4ウ1	7ウ4	10ウ4	7オ5	7オ5
3オ2	3オ7	6オ5	8オ7	6オ1	

用例数は二八組で全体の2・9%を占める。画数が変わらないものの中で、単に点画の位置や方向や長さの違いだけでは前田本と黒川本の字体の差異を説明しにくいものである。(又↓又)、(能↓能)(留↓留)のような例が見られる。

以上のように前田本と比較して、黒川本の漢字字体の半数近くに差異が認められ、差異の特徴が明らかとなった。次に、同じ江戸時代の転写本である『蒙求』の、親本と比較した漢字字体の差異の特徴を示し、江戸時代の転写本の漢字字体の特徴と言い得るものが認められるかどうか確かめることとした。

五、『蒙求』の漢字字体との比較

院政期写本『蒙求』と、これを直接の親本として転写された江戸後期写本『蒙求』の漢字字体を比較した結果、二本の字体に差異が認められるものは、全用例字数一二〇八組の中で三〇九組(25・6%)であった。

ここで『色葉字類抄』においてみられた字体の差異の特徴の中で『蒙求』にも見出せる差異の特徴を以下に挙げ、『蒙求』の漢字字体の用例とその所在を示す。

「表6」 「色葉字類抄」の差異の特徴と一致する「蒙求」の差異の特徴

C	C	B	B	B	B	B	A	A	A	A	A	A	A	分類
一 ハ	才 才	々 コ	爰 爰	三 三	木 才	、	上 止	廿 廿	弋 戈	一 心	ネ ネ	弓 弓	才 木	一致する部分
遵 遵 169 103 225	公 公 111 153 87	通 通 2	鑿 鑿 9	飛 飛 130	義 義 57	坑 坑 271 34	岐 岐 21	武 武 52	漠 漠 134	機 機 84	樞 樞 70	引 引 70	籀 籀 250	「蒙求」の漢字字様と所在 (上字が既取組字、下字が江戸後期字本である)
松 松 214	採 採 263 151				儀 儀 40	坎 坎 283 84	床 床 84					張 張 102	枚 枚 73	楊 楊 5
魯 魯 121	拾 折 266 152					邊 邊 103							排 排 69	棒 棒 57

前田本「色葉字類抄」と黒川本「色葉字類抄」の漢字字体の差異について

E	D	D	D	C	C	C	C	C	C	C
去	土	キ	夕	尺	月	門	一	文	尸	一
モ	士	士	夕	尺	日	川	ノ	文	尸	〃
熊(熊)	志(志)	壹(壹)	多(多)	鵬(鵬)	龐(龐)	蕭(蕭)	魯(魯)	文(文)	波(波)	匱(匱)
熊 4	志 218	壹 283	多 167	鵬 39	龐 291	蕭 61	魯 162	文 275	波 17	匱 192
			死(死)						破(破)	衡(衡)
			死 195						破 135	衡 9
										冤(冤)
										冤 254

以上のように25組の差異の特徴については『色葉字類抄』と『蒙求』とに一致が見られた。このうち、「志↓志」「遊↓遊」「義↓義」「夕↓文」は全く同一の字に関して同一の差異の特徴が見られるものである。江戸時代よりも前に書かれた写本をもとに江戸時代の人物が書き写した転写本に、同じ特徴が見出されるということは、これらの差異は単に一人の人物の個人的な書き癖ではなく、江戸時代の多くの人達にとつての共通する書くべき漢字字体の特徴を表していると言える。

六、まとめ

鎌倉初期書写の前田本『色葉字類抄』と江戸中期書写の黒川本『色葉字類抄』との伊部の対応する箇所に見出し漢字として記載された漢字の字体を比較した結果、全用例字数一六九六字のうち、七八六字(46.3%)に差異が認められた。

黒川本は、前田本との間に別の写本を経た転写本であると考えられていることから、この差異のすべてが江戸時代の書写者による書き換えであるとは言えない。しかし、国語辞書の見出し漢字という、辞書の使用者の規範となるべき字体について、半数近くも差異が認められることは特筆すべきことである。

特に、同じ差異の特徴が複数の種類の漢字に見出される場合や、江戸時代の転写本である『蒙求』にも同じ特徴がみられる場合については、書くべき字体の規範が鎌倉時代初期から江戸時代中期までの五百年間に変化したものと予想される。

今後は漢字字体の歴史の変遷を明らかにするために、今回の調査で得た差異の特徴の中からいくつかを取り上げ、書写年次の異なる複数の資料における字体の様相を調べていく予定である。また、江戸時代における字体変化の理由を明らかにするために、江戸時代に成立し書写された写本の字体の調査や、版本と写本の字体の比較を行っていきたい。さらに、『色葉字類抄』全体という視点から漢字字体を把握することができるよう調査を進めていきたい。

注

(1) 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」広島大学文学部紀要特集号3 昭和46年3月を参考にした。

(2) 山田俊雄「漢字字体の史の変遷の問題とその一方向」国語学72 昭和43年3月

山田俊雄「漢字手写の場合の字形の変遷について——楊守敬旧藏本將門記を資料とする調査の方法とその概略——」成城国文学論集1 昭和43年11月

佐藤稔「〈所〉へ〈原〉——上代における漢字の字形——」国語学研究14 昭和50年3月

佐藤稔「漢字字形の史的把握——「般若心経」による試み——」国語学114 昭和53年9月
などの先行研究を参考にした。

(3) 「字体」については私に次のようにとらえることとする。紙などの上に見られる具体的に個別的な字の形を研究対象として取り上げるために、線の太さや字の濃さ・大きさなどを抽象化して、点や線のつながりや曲折によって成り立つ形としてとらえ直したものを「字体」と呼ぶ。

(4) 山田孝雄「色葉字類抄攷略」西東書房 昭和3年などを参考にした。

前田本「色葉字類抄」と黒川本「色葉字類抄」の漢字字体の差異について

中田祝夫・峰岸明編『色葉字類抄 研究並びに索引 本文索引編』風間書房 昭和39年の影印本を使用した。また、島田友啓『色葉字類抄漢字索引一〜八』私家版 昭和41年〜45年を使用した。

(5) 池田利夫解題・築島裕訓点解題『蒙求古註集成上巻・下巻』汲古書院 昭和63年・平成1年の影印本を使用し、解説を参考にした。

付記

本稿は、平成六年度第十九回鎌倉時代語研究会夏期研究集会における口頭発表をもとに成稿したものである。発表の席上、小林芳規先生を初めとする諸先生方に貴重なご意見を賜りました。記して深謝申し上げます。